

# 海鳴要塞 2007



18歳未満の未成年者の購入を禁止します  
**FOR  
ADULT  
ONLY**  
18歳未満の未成年者の購入を禁止します



# 海鳴要塞2007

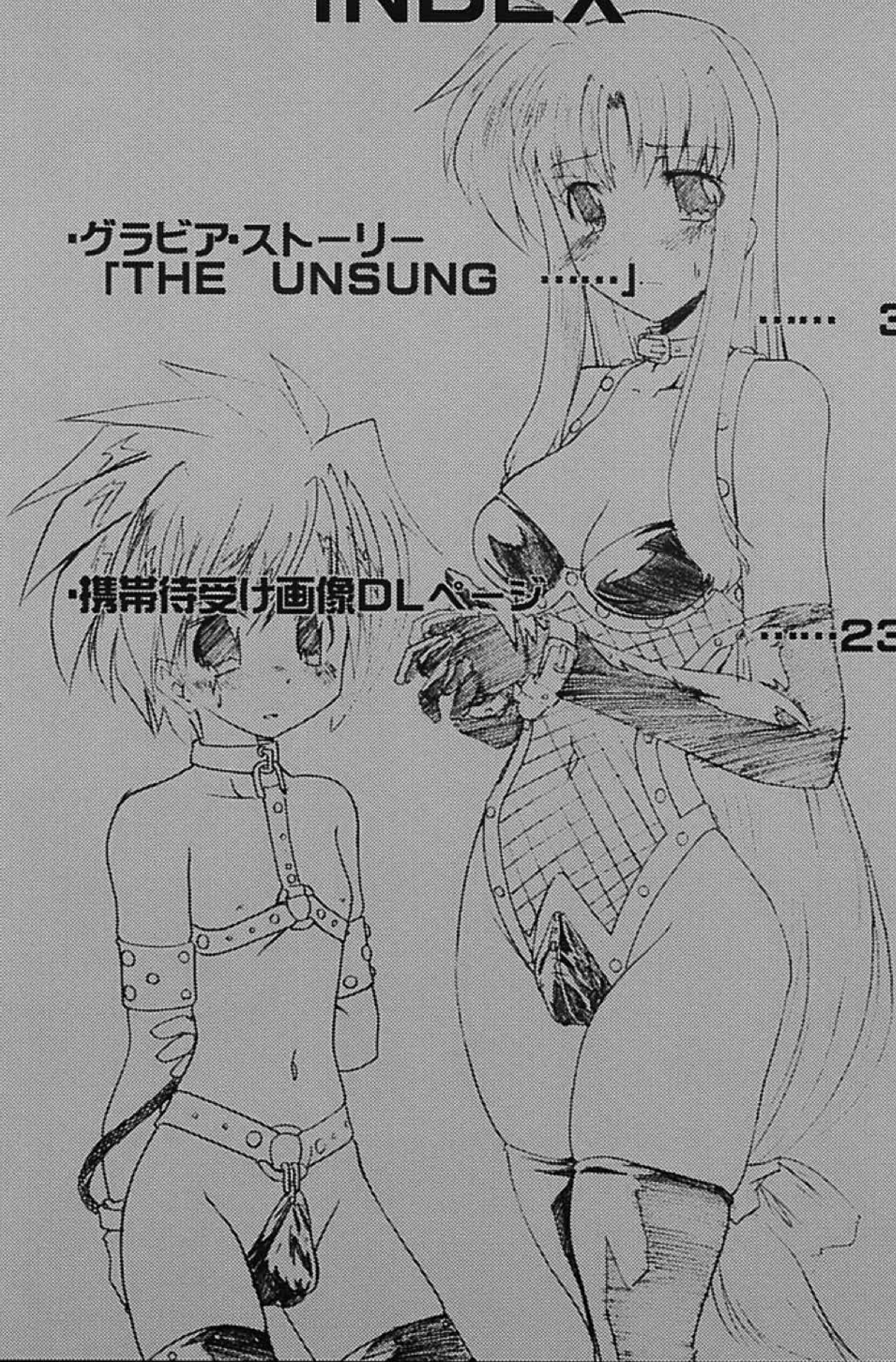
Fortress UMINARI  
CODE-2007

WARP Co. Presents

# INDEX

・グラビア・ストーリー  
「THE UNSUNG .....」 ..... 3

・携帯待受け画像DLページ ..... 23



# THE UNSUNG .....



——“合図”、だ…。

フェイトさんの胸元に赤いリボンタイを認めたとき、僕は、自分の心臓の鼓動が急激に速度を増していくのを感じた。

機動6課が設立されて、お互いしばらく隊員寮生活になると知ったときに交わした、二人だけの秘密のサイン……。

——あ、目が合った。わずかに、僕にしかわからないくらいわずかに、フェイトさんの瞳が潤んでいるのがわかる。

(返事を待ってるんだ、フェイトさん……)

拒む理由などない。僕も、その、  
——“して欲しかった”から……

いつもどおりに、特に曲がってもいないネクタイを直す。その瞬間、フェイトさんの瞳はかすかに揺れ——そしていつもの、優しい光をたたえた、あの輝きに戻った。



夜——。

「どうしたの、エリオ？こんな時間に」  
フェイトさんはあくまでいつもと変わらない口調で優しく声をかけてくれた。  
でも僕は知ってる、こういう時のフェイトさんは……”すごい”  
この前からそんなに日が経ってないはずだけど、どうしたんだろう…？

……そういえば、高町隊長は今夜は本局での会議で戻らないと言ってたっけ…。

(ああ、そういうことか)

ちょっと曖昧だけど、なんとなく納得できる理由を見つけて、僕は少し安堵した。

『すみませんフェイトさん、なんだか、寝付けなくて……それで…』  
「フッフ 私と同じだね。さっきから胸がドキドキして……止まらないんだ」

それは僕もだ。部屋を出てから、僕の胸はずっとはじけるくらいに高鳴っている。  
数瞬の後、意を決して僕は口を開いた。

『フェイトさん、一緒に寝…寝てくれませんか？』

「寝る？ 寝るって、どっちの意味？」

フェイトさんの視線が、僕の目とまっすぐに向かい合う。

「二人で一緒に、「リ」の字になって寝るの？  
私はそれでもいいよ、エリオと一緒になら…」

あくまで平静を保っていたフェイトさんの声色が、ここで一瞬途切れた。

僕はその続きを待ったが、フェイトさんは言葉ではなく、キャミソールの裾が擦り落ちる衣擦れの音でその後をとった。

「それとも……”いつもの”意味のほう？」

折り曲げた右足でキャミソールの裾が後退し、その奥にあるものを垣間見せる。

僕は恥ずかしさと罪悪感で頭が沸騰しそうになる。けれど最後の理性を総動員して、目をそらすことだけはしなかった。

それは女性にとって、とても失礼なことだと教わったからだ。

『その……いつもの、意味のほう、です……』

僕の声は少し上ずっていたかもしれない。フェイトさんはそれに気づいたのか、喉の奥でかすかに笑ったようだった……。





———チュブツ チュバツ

いつもの儀式が始まる。  
僕はフェイトさんの片脚を持ち上げ、その爪先に舌を這わせた。

前にヴァイス陸曹が僕に見せてくれた(というか、無理やり読まされた)本だと、こういうとき、女性は何日間も履いたストッキングや靴を舐めさせるらしいけど、フェイトさんの脚からは、ナイロン生地と、ほのかな石鹸の香りしかしない。

フェイトさんの優しさ、なのだと思う。だから僕は、その気持ちに精一杯応えようとして、一心不乱に舌を這わせる。

「フフッ、くすぐったい… エリオは、上手になってきたね？」

楽しそうに言いながら、呼吸が速くなっているのがわかる。

舌先がフェイトさんの親指をなぞるたび、ピクン、ピクンと反応する。

僕はその振動が僕の体に伝わる度、胸の中でなにかが熱を纏っていくのを感じていた。

それが大きくなり、形を為しはじめたとき、フェイトさんは急に脚を引っ込めた。

『？ フ、フェイトさん…？』

「ありがとう、エリオ。次は私の番だね……」



促されるまま床に脚を開いて座った僕の股間に、さっきまで僕が”ご奉仕(ヴァイス陸曹の本ではそう書かれていた)”していたつま先が伸びてきた。

『あ……っ』  
「ココ、硬くなりかけてるね？」

そのとおりだった。スパッツの中で僕のおちんちんは、ムクムクと起き上がり外からクッキリと見えるくらいにまでなっていた。

グッ                      グニッ

『んっ…あ…』

黒いニーソックスにつつまれた爪先は、始めは円を描くように、そして次第に触れているものの形にあわせて微妙な圧力を断続的にかけながら、なぞってきた。

それがスイッチとなっているのか、僕の口からはフェイトさんの爪先の動きにあわせるようにして声が漏れた。我慢しようと思っても、声はどうしても出てしまう。

少しすると、爪先の当たるところがだんだんと熱を帯びてくるのがわかった。

「エリオは体も心も、素直でいい子だね♪」

言葉の真意はまだよく理解できなかったが、何故かうれしく感じる。股間の熱も、その一言でまた一段と温度をあげたのが、フェイトさんの爪先の感触の変化ですぐわかった。





僕のおちんちんが硬くなりきった頃、フェイトさんはベッドの片隅に手を伸ばして、おもむろになにかをもって来た。

「それじゃあ準備運動は終わり。そろそろ始めましょうか？」

——ジャラッ

鎖の付いた首輪だった。それを目にした瞬間、僕の体は電流が走ったように硬直し……そして内側から湧き出る期待感でまるで氷が溶けるように弛緩した。

『はい……』

これからされることを想像して、股間の熱がいよいよ最高潮に達しようとしているのを感じながら、僕は立ち上がった。

フェイトさんの向こう側には、トルソーに着せられたPVCのボンテージコルセットがあった。

(これから、フェイトさんはアレに着替えるんだ……  
そして僕は……)

考えるまでもない、僕にはあれが——フェイトさんの手にあるあの首輪と、セットになる拘束具が用意されてるのだ……



フェイトさんから受け取ったのは、エナメル  
の光沢がある真新しい拘束具だった。

『フェイトさん、これ、新しいモノですか？』  
「そう、エリオの身長も日に日に大きくなるし、  
いつまでも前のままの首輪だと、プレイの最中  
危ないでしょう？」

たしかに、最近は手枷や首輪がちょっときつく  
感じてたかも。僕はてっきり、それがヴァイスさん  
の本に書いてた、「拘束されるだけで感じる」  
事なのかと思ってたけど……。

「どうしたの？初めてだから着付けがうまくいか  
ない？」

ハーネスをようやくつけ終わった僕の後ろか  
ら、すでに着替え終わったフェイトさんがやっ  
てきて、僕の両肩に手を添えながら聞いてきた。

『あ…ハイ、ちょっと、前までのと勝手が…』

リンスの香りが残るフェイトさんの髪の毛の匂い  
に戸惑いながら応えると、フェイトさんはそのま  
ま僕を右に向かせた。

「それじゃあ、あっちで私が手伝ってあげる。  
ほら、おいで……」



「ホラ、簡単だったでしょ？」

数分もたたないうちに着替えは終わった。

「ね？よく似合ってるよ、エリオ」

新しい拘束具は黒のエナメル製で伸縮性があり、僕の体をきつく締め付けるでもなく、けれどハッキリと、肌に存在を主張していた。

「拘束感はそんなにないけど、裏地は優しい感触だし、ずり落ちないから少しい激しいプレイでも安心よ」

『フェイトさん……あ、有難うございます…』

フェイトさんはプレイのときも、いつもと同じように僕のことを気遣ってくれている…

それが僕にはたまらなく嬉しく……けど、最後の一言が気にかかった。

<— 少しい激しいプレイでも —>

……今夜は、激しいん…だ……。

僕は、これから始まる長い夜を想像し、小さな不安と、大きな期待の両方を感じていた…。





「んっ… んむ … うむっん……」  
『ふ…ふうっん……あむっ う…』

最初はいつも、キスからだ決めていた。  
僕もフェイトさんも、ただただ無心にお互いの唇と、その奥にあるものを求め合う。  
フェイトさんとこんな関係になった最初の頃は、「キスなんて…」と思っていた。その後にある、プレイの事ばかりを考えていたから…

……けど、今は違う。この時間がとても貴重に思えてきた。  
フェイトさんの唇、肌、息遣い…。そのすべてをこんなにも身近に感じることができる瞬間が、他にあるだろうか？

僕はかすかに瞼を開いて10センチもない距離にあるフェイトさんの瞳を見る。その紅い輝きは僕の視線と絡み合い、かすかに潤んでいるように見えるのは、僕のきのせいだろうか？

「……………っ ん…」

最後に一際長く唇を吸いあって、胸にわずかの喪失感を覚えながら、僕らはようやく離れた。



「見て…」

床に四つんばいになった僕の目の前で、フェイトさんは大きく脚を開いてベッドに座った。


見上げたその表情は照明を抑えた薄暗い部屋の中ではハッキリみることはできないけど、息遣いの荒さから、上気してるんだろうということは解る。今の僕と同じだ……。

視線を落とすと、そこにはフェイトさんの秘部があった。綺麗な金髪と同じ色の茂みに覆われたそこは、かすかに濡れていた……。

「私…エリオのそんな恥ずかしい格好を眺めて、エッチな気分になっちゃったの…いやらしいでしょう？」

『フェイトさん……』

「私のはしたないココ……、エリオに慰めて欲しいの…」



「んっ…あ… ふうっ……んっ あん、ああ…  
エリオ…」

フェイトさんの秘唇の周りを舌でなぞる度、僕の頭上から甘く、切ないため息交じりの声がある。

両手で太ももの内側を、痛くない程度に抑えて、自分の頭部が入るくらいの余裕を作ると、僕はそのまま顔をうずめ、一心不乱に舌を動かし続けていた。

「…あ ああ、あ…」

息遣いの中に埋もれていた声が、次第にはっきりと形を成してくる。

『(…前から思ってたけど、フェイトさんって僕とおなじ“M”なんだろうか……?)』

そう重いながらも舌は休めない。だんだんと大きくなっていく声と、痙攣にも似た体の反応には、まるで僕がフェイトさんを責めているような錯覚さえ覚えた。

「ふっ…ふあ……あ、え、エリオ、も、もういいわ。じ、上手ね……ご、”ご褒美”をあげる…」

息を整えながら口にした「ご褒美」という言葉に僕の体が反応する。

僕は頭を離し、両手を後ろに組んでフェイトさんを待った。

“ご褒美”——次は、僕が今のフェイトさんのようにはしたくない声を上げる番だ……



『あ…あっ！ 痛……っ！』  
「ほら、今のうちにしっかり剥いておこうね？」

大きく、硬くなったおちんちんの先から、焼けるような痛みが走った。同時に、フェイトさんの左手の力が強くなる。

……かと思うと、急に力が弱くなる。フェイトさんの左手は、人差し指から小指まで、まるで波のような動きで僕の敏感な部分を愛撫する。こんな責められ方は初めてだ。先端の痛みと、その下から強くは無いけど絶えず与え続けられる快感がごちゃまぜになって……

『…あ あっ あああ……』

僕はまるで女の子のような声を上げてしまっていた…。

「これが”ご褒美”。エリオはえっちな子だから、すぐオナニーしちゃうでしょ？でも、ちゃんと剥かないまましつづけちゃうと、大人になってから困るから、今のうちから、皮を延ばさないオナニーの仕方を教えてあげる…」

指の腹を使って揉むのか……と理屈を考えてられたのは最初のうちだけで、それを過ぎると僕の頭はもやがかかったかのようにへ



、感覚が鈍っていく。  
……違う、逆だ。全ての感覚が股間に集中して、過負荷(オーバーロード)状態になってるのだろうか？

けれど、フェイトさんの手や、触れ合っている体、体温の全てまで感じなくなってるわけじゃない、むしろ暖かくて、安心さえ感じるとは……

『あっ あんっ！ あっあっあっ…』

「気持ちいいのね？」

『ハ……あ……は、ハイ……っ！ あんっ！』

「ちゃんと自分の口で言いなさい、どこが気持ちよくて、どうしてもらいたいのか、さあ」

どうしろといわれたのか、僕の頭ははっきり理解してはいなかった。けれど真っ白になっていく意識とは逆に、僕の体は“ご主人様の命令”を正確に認識し、実行に移した。

『あ…、お、おち…あんっ …おちんちんがっ

…きも、キモ、気持ちいいで…すうんっ！

もっと、もっと僕のおちんち…を、イジ、

イジメ…あ…ああああああっ！！

ひああ…い、イクっ イクっ！！』

「え…ち、ちょっと、エリオ、だめよ、まだ、まだイっちゃd……っ！？」





「……エリオ」  
『！は……はい……』

ああ……怒ってる…フェイトさん怒ってる…

「私、いつも言ってるわよね…覚えてる？」  
『あ…えと……』  
「忘 れ た の？」

うあ……うわわ…

『い、いえっ！あ、あの…ふ、フェイトさんのお許しがなまま、イってはいけない…です……』  
「そうよね……それじゃ、これは？」  
『あ…えと、ほ、僕のせ、精液、です……』

気まずい間……あうう…

「…ふーん(ベロツ)」  
『あ……』

フェイトさんはおもむろに、鼻の頭にかかった僕の精液の滴を指で掬うと、舐めてしまった……そして少しの後、あの紅い瞳に少しの怒りと多分に含んだ”期待”の色を添えて、

「じゃあ、〈お仕置き〉だね？」

と、宣告したのだった。

『!!…ま、まさかそれを?!』

「そうよ? さっきは加減を忘れて本気で責めちゃってた私も悪かったし、特別に、エリオの好きなものを使ってあげるからね」

フェイトさんの股間に生えたその”モノ”……それを目にした瞬間、僕は思わずお尻をすぼめた。

男性の持っているものと同じ場所にありながら、決定的に違う突起を三つも備えたグロテスクな棒…

フェイトさんはコレを、「ペニマグラ」と呼んでいた。僕がプレイで失敗したときに使われるお仕置き道具はいくつかあるけど、これはもっとも恥ずかしくて……

……気持ちいい……。

「エリオのお尻はこのくらい、なんともないものね」

『あ、う……』

顔が真っ赤になるくらい恥ずかしいけど、事実だから何も言えない。もっと太いモノでお仕置きされたことも少なくない…

ペニマグラの先端は、フェイトさんが垂らしたローションが照明を反射して、テラテラ光っていた。

『(アレが…これから、僕はアレに貫かれちゃうんだ……はしたない僕の、罰として…)』

硬く閉ざしたお尻の奥で、かすかに溶け出す「なにか」があることを、僕は自覚せざるを得なかった。





———プチュッ グチュ……

『あっ！んうっ！ あふうっ……！』  
「まずはエリオのお尻が裂けないように、じっくりとココをほぐしてあげないとね？」

僕のお尻の中で、フェイトさんの指が動くたびに、僕の口から声が漏れる。  
なんとか我慢しようとしても、さっきフェイトさんにおちんちんを踏まれたときと同じように、止めることは出来ない。

『ひあんっ！ あう！…あ…ほ、僕、男の子なのに……こん…なあっ?!』  
「エリオだけじゃないわ、男の子はみんな、ココに弱点があるの。どんな強い子でも、ココを責められると……ほうらっ(ぐにっ)」  
『ひっ…ああああああっ!!』

お尻の中の一点を、指が一際つよく押した途端、僕の声も一段大きくなった。

『(スゴイ……こ、これ、あのペニマグラで突かれたときと同じ……?!)』  
「ふふっ…もしかして気づいた？ココが“前立腺”っていうの。男の子が、女の子の気分を味わえる場所よ」

まるで電流が走ったような刺激だった。一瞬目が止まるくらいの快感に、僕は大きくのけぞる。

「エリオ……本当に可愛いよ。アヌスもこんなに大きく開いて……そろそろ大丈夫ね」



『あ…あむ…んく…』  
「ふふっ、これから自分を貫くモノだから、念入りにね？」

既にペニマグラはローションまみれだったけど、僕はそれにも関わらず、一心不乱に自分の唾液を搾りこみ続けた。

フェイトさんはどんな表情で僕を見下ろしているだろう？

これからペニマグラによる処刑を待つだけの僕は、頭上のフェイトさんの顔を見上げることが出来なかった。

「……さあ、もういいわ。お尻を突き出しなさい」  
『はい……フェイトさん』

言われるままに、僕はペニマグラの先端に自分のお尻をあてがう。

「それじゃあ、エリオ。始めなさい」  
『…あ…はい……。僕は、ふ、フェイトさんの言いつけを守らず、粗相をしてしまいました…。どうか、この罰をもって、お許し、くだ…さい……』

お許しの言葉の代わりに、フェイトさんの両腕が、僕を抱きしめた。

「許してあげる。……愛してるわ、エリオ」

両腕に力がこもり、僕の体を一気に押し下げるそれは、フェイトさんの愛情、そして、僕の処刑執行の言葉だった。



『——はヒッ！？』

あ……う…ス、すごいつ…！

「事前にしっかりとほぐしたから、痛みはないでしょう？ホラ、さっきの前立腺、どう？ペニマグラの突起がこすってるの、わかる？」

『ハッ……ハッ！あ…ハ、ハイッヒッ！』

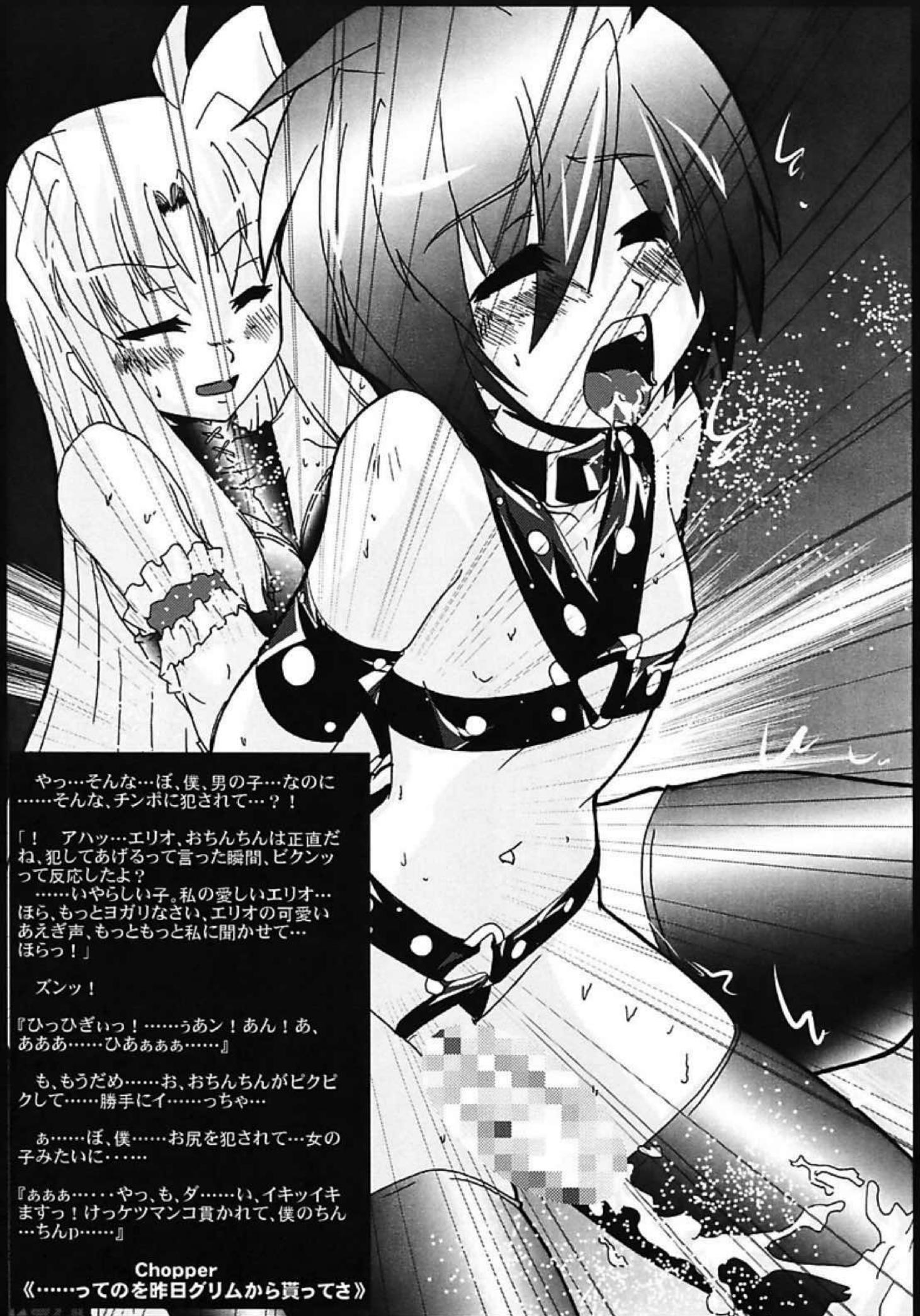
も、もう返事すら…できないっ…！！

な、<sup>なか</sup>肛内でハッキリ形がわかるくらい、べ、ペニマグラが…ペニマグラがああっ！！

『アッアンっ！あう…はっハオ…アオオツ！』  
「ンッ！ふ、フッ、やっぱりエリオはコレと相性いいみたいね。ちょっと動いただけでホラ…」

やっ！やだ……そんな……  
…お、奥まで……っ！！

「……これはお仕置きだけど、特別に許してあげる。“イってもいいよ”？  
女性の私にチンポで犯されて、女の子のようにヨガリ狂いながら、イかせてあげるっ！」



やっ…そんな…ほ、僕、男の子…なのに  
……そんな、チンポに犯されて…？！

「！ アハッ…エリオ、おちんちんは正直だ  
ね、犯してあげるって言った瞬間、ビクンッ  
って反応したよ？

……いやらしい子。私の愛しいエリオ…  
ほら、もっとヨガリなさい、エリオの可愛い  
あえぎ声、もっともって私に聞かせて…  
ほらっ！」

ズンッ！

『ひっひぎいっ！……うあん！あん！あ、  
あああ……ひあああ……』

も、もうだめ……お、おちんちんがビクビ  
クして……勝手にイ……っちゃ…

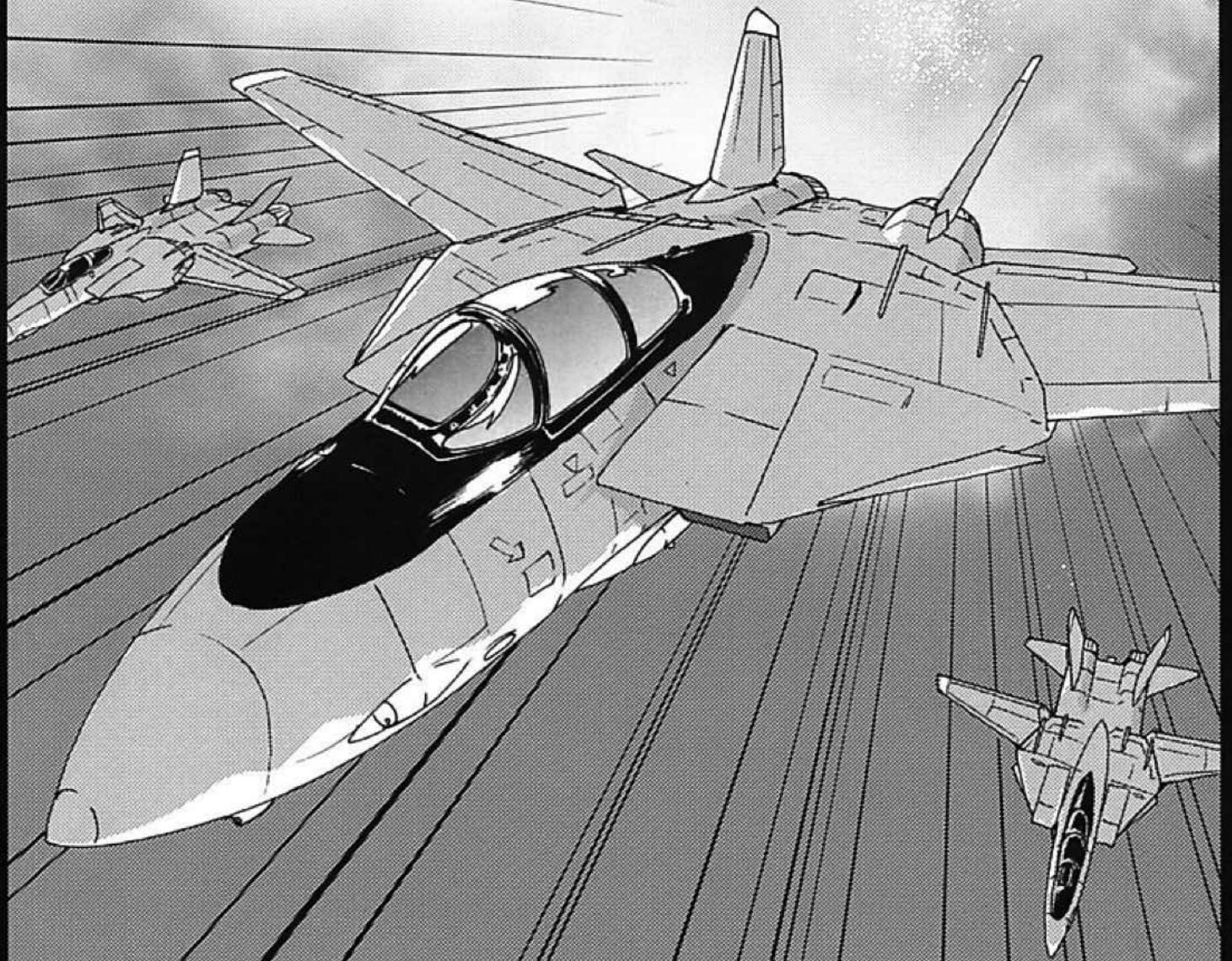
あ……ほ、僕……お尻を犯されて…女の  
子みたいに……

『あああ……やっ、も、ダ……い、イキイキ  
ますっ！けっけツマンコ貫かれて、僕のちん  
…ちんp……』

**Chopper**

《……ってのを昨日グリムから貰ってさ》

Chopper  
《……なあブレイズ、こういう同人とか、好きだよな?》  
〈〉はい いいえ [ ]



Thunder Head  
《こちらサンダーヘッド タウエンポート大尉、任務中に昨夜読んだ  
同人誌の内容を無線で強制的に聞かせるのは憤めと何度言わせるんだ?》

# 携帯待ち受画像DL



1枚目はエリオ&フェイトのパーティドレス姿。

あんな内容のもの描いておいて言うのもナンですが、この二人のカップリングというのは見て頬が緩むようなほのぼの親子感が良いですね。汚すのがちょっとためられるくらいの平和な雰囲気似合うと思うわけです。

そしてですね…

その幸せな空気をですね……

引き裂いて汚すのがですね！

最高なんですよね！！(逮捕

ま、それはともかくですね、今回も皆様の携帯に、恥ずかしくてとてもじゃないけど入れられないような内容の画像をですね、提供していきたいとおもうわけでしてね……



<http://45acp.sakura.ne.jp/3g/erifa01.jpg>





## チャイナドレスなフェイトさん

第七話「ホテル・アグスタ」のドレス姿は眼福でございました。DVDでより眼福なお姿になっているのを期待しております。

手首や首のアレを見てもお分かりのように、これもいわゆる「ボンテージ絵」です。ていうか、自分いままで、こういう道具やシチュエーションのないフェイトさん絵を描いた記憶が数枚分しかございません。

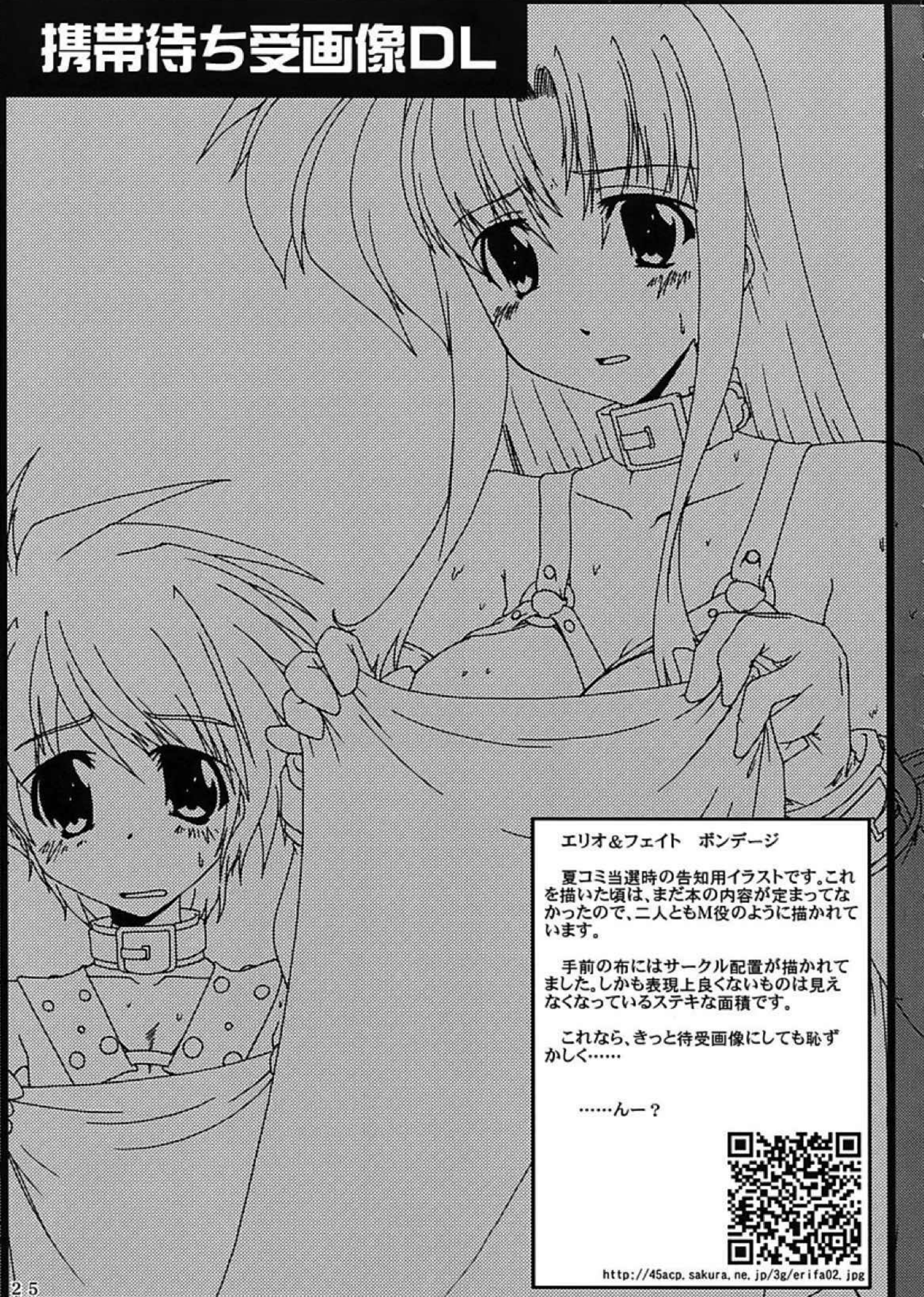
多分このくらいの待ち受画像なら…大丈夫だよね？  
ちょっと困り顔だけど大丈夫だよね？

ばんちゅ見えてるけど大丈夫だ……ん？



<http://45acp.sakura.ne.jp/3g/chinafate.jpg>

# 携帯待ち受画像DL



エリオ&フェイト ポンテージ

夏コミ当選時の告知用イラストです。これを描いた頃は、まだ本の内容が定まっていなかったので、二人ともM役のように描かれています。

手前の布にはサークル配置が描かれてました。しかも表現上良くないものは見えなくなっているステキな面積です。

これなら、きっと待受画像にしても恥ずかしく……

……んー？



<http://45acp.sakura.ne.jp/3g/erifa02.jpg>

# 携帯待ち受画像DL

本誌「海鳴要塞2007」表紙です。

フェイトさんは元々のバリアジャケットそのものがボンデー的方法論なので、この手のモチーフは非常に相性よくフィットします。

大人フェイトのBJも、ベルトや首輪などの直接的なモチーフこそなくなってますが、「なんかSS将校っぽい」という雰囲気は、そのまま海外のSM文化に通じるわけで、その意味ではむしろ大人フェイトは隠喩的な意味でよりSM的であり、フェティシズムの体現者であオールハイムブリタァ〜ニア！

……との主張をですね、ウチの飼い猫にしてみたんですがね、アイツ目の前で草吐いて逃げやがった！



<http://45acp.sakura.ne.jp/3g/cover.jpg>



同じく裏表紙。

男性用ボンデーってというのはSMファッションの1ジャンルとして確立されてるらしく、ネットで調べると膨大な量の情報が手に入ります。

…という書き方をすると事の本質が伝わらないので修正します。

「ネットでイメ検索するとワラワラと砂吐く画像が出てくる」

……ということです。

モデルになってる男性がおしなべて無表情なのは、SAN値にかなりの大ダメージです。

やっぱわぁいは二次元に限るな！



[http://45acp.sakura.ne.jp/3g/b\\_cover.jpg](http://45acp.sakura.ne.jp/3g/b_cover.jpg)

どうも45ACPです。  
今回は「エースコンバット6 発表記念作」である本誌を手にとっていたいただき、誠にありがとうございます(えー)。

当初はエリオ&フエイトがドローンに捕らえられて触手や媚薬やギロチンでバヤバヤされちゃうのを予定してた……なんですが、それって前回の本と同じ展開じゃねえの?! ってのと、劇中での時間経過がタイトで、どうも本編にこのお話をもぐり込ませる時間的余裕ないみたいなので、少々マイルド方向に路線修正することにしました。

あ、あとこの本書いてる最中に17話が放映されたわけですが、エリオの過去の重さと自分が書いてる内容のアレさ加減のギャップがすごい、その、なんていうんですか、うん……

「申し訳ない」

と……いう気分ですすね、なんかPCの前で気まずくなりながら作業してました。アハハハ バカだ俺ー?!

さて、今回は順当に行けば冬コミ……になるんですが、まだ未定です。リンディさんなんだか相変わらずお若いっていうか、むしろ若すぎね? これはつまり……そう! 年増園開園ですっ!! (ソクッ)  
……という形でモチベが生まれつつあるので、次回もスーパーハラオウン家タイムかもしれないかも。

2007年8月

45ACP



当初予定してたほうの一枚。  
ドローンにつかまって連れて行かれた先で、  
セインとクアットロによるスーパー親子丼タイム!

……になるはずでした。

いつかリベンジしたいなあ。

スバル・中島一郎だよ

やあ・僕

ロボットの  
戦闘機人だよ



奥付

## 海鳴要塞2007

発行日 2007/08/19

発行者 45ACP

URL  
<http://45acp.sakura.ne.jp/>

e-mail  
[giro@45acp.sakura.ne.jp](mailto:giro@45acp.sakura.ne.jp)



This contents was printed by Tokyo Shimaya Printing Co

Mobile QR



**Fortress "UMINARI"**  
**CODE-2007**

**WARP.Co Presents**

**FOR ADULT ONLY**